宝治元年『院御歌合』注釈―「海辺月」題―

位藤邦生　森下要治
田野慎二　山崎真克
赤迫照子　藤川功和

はじめに

『尾道大学芸術文化学部紀要』第7号（平成20年3月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「海辺月」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

五十三番―位藤邦生（長崎大学）、五十四番―赤迫照子（広島大学図書館）、五十五番―田野慎二（広島国際大学）、五十六番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、五十七番―藤川功和（尾道大学）、五十八番―森下要治（広島文教女子大学）、五十九番―赤迫、六十番―田野、六十一番―山崎、六十二番―藤川、六十三番―山崎、六十四番―田野、六十五番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本〔一〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕

支―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）

群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈五十三番〉

五十三番　海辺月①イ

左　勝ロ　女房

塩かまの浦の煙ニはイもたえにけり月みんろイとての海士のし態へに（ハ続後撰②）

右　小宰相

わかのうらや④トおなしなかれチの君か代に又立いてゝ月をみる哉⑤

左此しほかまの浦こそ、業平朝臣⑦わかみかと

六十余こくの中ににたる所なしと申をきリ侍にも

猶過て、めつらしくありかたき、あまのしわさと見ヌ

たまへ侍れ、いまの世まていかてよみ残し侍にか、

世くたれりとは思ふへくも侍らさりけりルもろ〳〵のヲ

みちもかくこそワ侍らめと、たのもしくも侍かな、

右歌カ、おほろけにては此かたはらにたちいつへ

き事とも見え侍へらねヨは、とかくさたなきをめんほくにて

侍へきにこそ、返ゝ以左為勝、

【校異】

イ　海辺月―ナシ（支）　ロ　勝―ナシ（書）　ハ　続後撰―ナシ（書・内・支・聚・群）、続後撰、秋中（聚）　ニ　煙も―煙も（書・内・支・聚・群）　ホ　月みんろイ―月みむ（書）、月みん（内・支・聚・群）　ヘ　し態に―しはさか（支）　ト　わかのうらや―わかのうら（支）　チ　なかれ―みなと（群）　リ　をき―ナシ（書）　ヌ　見たまへ侍れ―見給へれは（内・聚・群）　ル　侍らさりけり―侍らさりける（書）　ヲ　もろ〳〵の―ものを（書）　ワ　かくこそ―かく（書・内・支・聚・群）　カ　右歌―右の歌（支・聚・群）　ヨ　見え侍へらねは―みえねは（書）

【他書所伝】

〈左歌〉

『秋風抄』秋歌・八〇・「御歌合、海辺月」・院御製

塩竈の浦のけぶりもたえにけり月みむとての海士のしわざに

『続後撰和歌集』秋歌中・三四八・「十首歌合に、海辺月といへる心をよませ給うける」・太上天皇

しほがまのうらのけぶりはたえにけり月見むとてのあまのしわざに

『題林愚抄』秋部三・（海辺月）続後撰・四一四八・太上天皇

しほがまの浦の煙はたえにけり月みんとてのあまのしわざに

『題林愚抄』秋部三・（海辺秋月）続後撰・四一六二・太上天皇

塩がまのうらの煙はたえにけり月みんとてのあまのしわざに

『歌枕名寄』七二九二・（海辺秋月）続後六・太上天皇

塩がまのうらのけぶりはたえにけり月みんとてのあまのしわざに

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①海辺月―勅撰集では『千載和歌集』に「ながめやる心のはてぞな

かりけるあかしのおきにすめる月影」（秋歌上・二九一・「海辺月といへるこころをよめる」・俊恵）、家集では『従三位頼政集』に「住吉の松の木まより見渡せば月おちかかるあはぢ島山」（上巻・二〇五・「海辺月」）とあるのが早い例で、『新古今和歌集』には「秋の夜の月やをじまのあまのはらあけがたちかきおきのつりぶね」（秋歌上・四〇三・「和歌所の歌合に、海辺月を」・家隆）のほか、建永元年（一二〇六）七月二十五日「卿相侍臣歌合」の折の「海辺月」題の歌が、雑歌上の部に三首並べて載せられている（一五五六・慈円、一五五七・定家、一五五八・秀能）。院政期から鎌倉期にかけて好まれた歌題であった。

②塩かまの浦―歌枕。陸前。今の宮城県塩釜市。海士と「塩焼く煙をよむことが平安末期以後は圧倒的に多くなった」と片桐洋一氏は『和歌大辞典』で説明している。「ふるゆきにたくもの煙かきたへてさびしくもあるかしほがまのうら」（『新古今和歌集』冬歌・六七四・「家に百首歌よませ侍りけるに」・兼実）等が先行例。

③海士のし態に―「ふねのうちなみのしたにぞおいにけるあまのしわざもいとまなき世や」（『千五百番歌合』雑一・千三百八十二番左・二七六四・良経）「はるの日ののどかにてらすおほぞらにむれたるたづのあそぶこゑごゑ」（右・二七六五・兼宗）の番における、慈円の判歌は、「なみのしたのあまのしわざにくらぶればそのこととなきたづのこゑかな」。月の夜に、塩釜の浦の煙が絶えたのが、月を見ようとての海士のしわざでないことは明らかであるが、それを海士の風流心からのようにとりなすのが、当時の風であった。たとえば、「こころあるをじまの海人のたもとかなつきやどれとはぬれぬものから」（『新古今和歌集』秋歌上・三九九・「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふことを」・宮内卿）など。

④わかのうら―歌枕。今の和歌山市。片桐洋一氏は『和歌大辞典』に「いっぽう、「和歌の浦」の「和歌」から「歌」「歌道」などを表象するようになるのも平安後期からである」と述べている。ここでは、和歌の隆盛と当該歌合の晴事を言祝ぐ表現となっている。

⑤おなしなかれ―和歌の技巧では「五十鈴川」「飛鳥川」「石清水」などととり合わせ、「同じ流れ」を「一貫する流れ」の意で「川の流れ」と「皇統」の意味を重ね合わせて用いる事が多い。「あまのがはおなじながれとききながらわたらむことのなほぞかなしき」（『後拾遺和歌集』雑一・八八八・周防内侍・「後冷泉院うせたまひてよのうきことなどおもひみだれてこもりゐてはべりけるに、後三条院くらゐにつかせたまひてのち七月七日にまゐるべきよしおほせごとはべりければよめる」）とあり、『讃岐典侍日記』下巻冒頭には、堀河院の崩御後宮仕えを退いていた讃岐典侍が院の後を継いで即位した鳥羽院に再出仕したときの心境を、さきの周防内侍の歌を引いて表現している（ただし第四句が「わたらむことは」）。周防内侍の歌では後冷泉院の後を継いだ後三条院が共に後朱雀院の皇子であることを「おなじながれ」と表現していた。当該歌も「皇統」の意が前面に出ており、「おなしなかれの君か代」は後堀河天皇、四条天皇の時代

の断絶を経て、後嵯峨院の御代に土御門天皇の流れが復活したことを指している。あるいは、後鳥羽院→土御門院→後嵯峨院の流れをも指しているか。

⑥月をみる―文運の隆盛を言祝ぎ、今回の歌合の晴儀に参加できた喜びを隠喩として表現していよう。

⑦業平朝臣わかみかと六十余こくの中ににたる所なしと申をき侍―『伊勢物語』第八十一段に「わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たる所なかりけり」とあるのを踏まえた指摘。

【通釈】

五十三番　海辺月

左（歌）　勝　　女房（後嵯峨院）

塩釜の浦の煙も絶えてしまったことだ、（塩焼く煙に遮られることなく）月を見ようとての、海士の（風流な）しわざのために。

右（歌）　　（承明門院）小宰相

和歌の浦（の文運盛んなこの時）よ、同じ流れの君の御代に（私も）再び立ち出（ることができ）て、（光栄にも）月（の如くあきらかな歌合の晴儀と歌）を見ることだ。

〔判詞〕左（歌）は、この塩釜の浦こそ、業平朝臣が「帝の治めるわが国六十余国の中で（他に）似た所がない」と申しおきましたのにも猶過ぎて、（この絶景の所以を）珍しく有難い、海士のしわざと御解しなさいました。いまの世までどうして（こんな視点を）詠み残してございましたのか。（こんな例を見ると、次第に）世が下った（など）とは、思うべくもございませんでした。諸々の道もまったくこうであってほしいと、頼もしうもございます。右歌は、なみたいていではこの（左歌の）傍らに立ち出ることができるとも思われませんので、あれこれと沙汰（批判）がないのを（せめての）面目とするべきでしょう。どう考えても左をもって勝といたします。

〈五十四番〉

五十四番　　太政大臣

左

①蘆そよく難波の浪の数②〈に③身にしめとすむ月の影哉

右　勝ロ　　俊成卿女

④しほるなよ月をは袖の秋の夜にもし⑤ほたれてもすまのうら人

難波のなみの数〈に身にしめとすむといへる

⑥けしき、さこそとすてかたく侍に、しほるなよ月をは

袖のとて、もしほたれてもすまのうら人といへる心

詞妖艶のすかた、ことによろしく侍にや、とふ人

あらはといへる本哥ホの心にもゆつりて、勝と申へきにや、

【校異】

イ　と―て（群）　ロ　勝―ナシ（書）　ハ　と―て（内・支・群）

ニ　けしき（いイ）―景気（書・内・支・聚・群）　ホ　本哥の心―本哥心（内・群）、本哥（支）　へ　勝と申へきにや―勝とて申きにや（内）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』雑歌下・九六二

田むらの御時に事にあたりてつのくにのすまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける　在原行平

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ

【語釈】

①蘆そよく難波―「難波」は摂津国の歌枕。『万葉集』以来、「蘆」とのとり合わせで海辺の景を詠んだ例が多い。「月」を詠み込むのは「なにはえのあしまにやどる月みればわが身ひとつもしづまざりけり」（『詞花和歌集』雑上・三四七・「神祇伯顕仲ひろたにて歌合し侍るとて、寄月述懐といふことをよみてとこひ侍りければつかはしける」・顕輔）が早い例。当該歌合にも五十六番右・公相「をしてるや難波の空の夕なきにあしの末はを出る月影」がある（永青文庫本以外は全て「難波の浦」とする）。

②数くに―波のひとつひとつに。「かずかずに月のひかりもうつりけり有明の庭の露のたま萩」（『夫木和歌抄』秋部二・「三十首歌人人によませ給し時、草花露を」・実兼）。

③身にしめとすむ月の影哉―「身にしみよ」と言うように、月影が澄んでいる様子。「むらさきにたなびくくものたえまよりみにしむつきのいろをみるかな」（『重之子僧集』・四七・「よぶかきつきをながめはべりて」）。

④しほるなよ月をは袖の秋の夜に―「しほる」は「絞る」。絞らずに濡らしたままで、袖に秋の月を宿しておいて欲しいという願う。「秋のよは露もなみだもあまるともしぼらじ袖にやどれ月かげ」（『光経集』「月」・五七一）。「月をは袖の」は「昔思ふ涙のそこにやどしてぞ月をばそでの物としりぬる」（『新勅撰和歌集』雑歌一・一〇七五・「五十首歌よみ侍りける時」・守覚法親王）が先行例。

⑤もしほたれてもすまのうら人―「もしほたる」は海藻に海水をかけて塩をとること。袖がぐったりとなるほど涙を流す意を掛ける。「袖」をとり合わせた先行例には「恋をのみすまのうらびともしほたれほしあへぬ袖のはてをしらばや」（『新古今和歌集』恋歌二・一〇八三・「百首歌たてまつりし時、恋歌」・良経）がある。

⑥けしき（いイ）―歌論用語「景気」。詞によって視覚的な映像・情趣が感じられることをいう。

【通釈】

五十四番

左（歌）　太政大臣（西園寺実氏）

蘆のそよぐ難波の浪のひとつひとつに、「身にしみよ」と澄む月の

光であるよ。

右（歌）　勝　　俊成卿女

藻塩が垂れても（袖を）絞るなよ、須磨の浦人よ。月が袖に宿る秋の夜に。

〔判詞〕「難波の浪の数〳〵に身にしめとすむ」という景色はさぞや、と捨てがたくございますが、「しほるなよ月をは袖の」といって「もしほたれてもすまのうら人」という心詞の妖艶の体は、殊更によろしくございますでしょうか。「とふ人あらば」という本歌の心にもお譲りして、（右歌を）勝と申すべきでしょうか。

〈五十五番〉

五十五番

左　勝イ　　通忠ロ

難波かたあまのたくなはなかしとも思ひそはてぬ秋の夜の月（①続後撰ハ　②　③　ニ）

右　　実雄ホ

昔よりきくや明石の浦の名も空にしらるゝ秋のよの月（④　⑤）

左、あふ人からの秋の夜、あまのたくなはにひきなされ（⑥）

てよろしく侍にこそ（ト）、右、明石のうらの名此程（チもイ）（⑦）

おほくめなれ侍をもちて負侍へし（リ　ヌ　ル　ヲ）、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　通忠―権大納言通忠（書・内・支・聚・群）　ハ　続後撰―ナシ（書・内・支・群）、続後撰、秋中（聚）　ニ　思ひそ―思ひも（群）　ホ　実雄―権大納言実雄（書・内・支・聚・群）　ヘ　名も―浪（内・支・聚・群）　ト　侍にこそ―侍るに（内・群）、侍る（支）、侍るにや（聚）　チ　此（もイ）―こそ（書）、この（内・支・聚・群）　リ　おほく―ナシ（支）　ヌ　めなれ―めされて（内・聚）、ためされて（支）、めなれて（群）　ル　もちて―もて（群）　ヲ　侍へし―侍れかし（書）

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三五六・「十首歌合に、海辺月」・右近大将通忠

なにはがたあまのたくなはながしともおもひぞはてぬ秋の夜の月

『歌枕名寄』難波篇・三六二四・「続後六」・右大将通忠

なにはがたあまのたくなはながしとも思ひぞはてぬ秋の夜の月

『題林愚抄』秋部三・四一四九・「同（続後撰）」右大将通忠

なにはがたあまのたくなはながしとも思ひぞはてぬ秋のよの月

〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉『古今和歌集』恋三・六三六・「題しらず」・躬恒

ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋のよなれば

【語釈】

①難波かた―摂津国の歌枕。「わすれじな難波の秋のよはのそらこと浦にすむ月はみるとも」（『新古今和歌集』秋上・四〇〇・「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふことを」・宜秋門院丹後）。

②あまのたくなは―海人が潜水する際に、腰に結びつける栲縄。「栲縄」は、命綱を意味するとも言う。ここでは、「ながし」を導く序として用いられている。「伊勢の海にはへてもあまるたくなはの長き心は我ぞまされる」（『後撰和歌集』恋一・五七九・「心みじかきやうにきこゆる人なりといひければ」・読人不知）。

③なかしとも―「長し」は、栲縄が長い、の意と、秋の夜が長い、の意を掛ける。

④明石の浦の名も―「明石の浦」は、播磨国の歌枕。地名は、月の名所であることに由来する。「名」には、名声・評判の意もある。「秋のよの月ゆゑえたる浦の名を雲にあらしのつげて過ぎぬる」（『最勝四天王院和歌』明石浦・一五二・慈円）、「明石がた月にみえ行く浦の名を秋とふ人や空にしるらん」（『建保名所百首』明石浦・五八六・範宗）、「かかりけるあきの今夜の月よりやうらをあかしの名にさだめけむ」（『名所月合』二二番右・四四・為家）。

⑤空にしらるゝ―空にはっきりと分かる、の意。「るる」は自発の助動詞。「これやこのあかしのうらととはずともそらにしらるる月のかげかな」（『有房集』一九七「たかまつのみやのうたあはせに、ところによりて月あかしといふことを」）。

⑥ひきなされて―「ひきなす」は、意識的に引きつける、の意。本歌は、長いと言われる秋の夜も、逢う人次第で、長くも短くも感じられる、という恋歌。通忠歌では、難波潟で秋の夜の月を眺めていると、夜が長いと思い定めることはない、と詠じられている。

⑦明石のうらの名此程おほくめなれ侍―④に掲げた例のほか、『院御歌合』では、他に、五十八番左（為経）・六十五番左（越前）が、「明石」の「月」を詠じる。為経歌について、為家は、「さきに申侍りつる明石の浦此ほと繁昌し侍にや」と評している。

【通釈】

五十五番

左（歌）　勝　　（源）通忠

海人の栲縄が長いように、秋の夜を長いともすっかり思い込むわけにもいかないな。難波潟で、（今宵の美しい）秋の夜の月を眺めていると、（思わぬうちに早く時間が過ぎて）。

右（歌）　　（藤原）実雄

昔から（音に）聞いている明石の浦の名も、秋の夜の月によって、空にはっきりと分かることだ。

〔判詞〕左（の歌）は、「あふ人からの秋の夜」が、「あまのたくなは」に意識的に引きつけられた趣向が良いように思われます。右（の歌）は、「明石のうらの名」に注目して詠んだ歌が、この頃多く目慣れていますので、負けとするのがよろしいでしょう。

〈五十六番〉

五十六番

左　　権大イ―　定雅

①わたの原空もひとつに見わたせはロかへイうつらぬ月に波そかゝれる

右　勝ト　　公相ニ

をしてるや難③波のホ空の夕なきにあしの末はを出る月影

左、下句おろかなる心まとヘひて、わきまへ侍トらす、

海チより出て浪に入、よひのま、暁かたなとのことに

侍にや、さなくリてはうつらぬ月④にかゝる波思よるへき

事ともおほヌえ侍らす、右、させるとか侍らルねは、

やすきヲにつきて以右為勝、

【校異】

イ　権大―権大納言（書・内・支・聚・群）　**ロ**　うつらぬ（かへイ）―うつらぬ（書・内・支・聚・群）　**ハ**　勝―ナシ（書）　**ニ**　公相―権大納言公相（書・内・支・聚・群）　**ホ**　空―うら（書・内・支・聚・群）　**ヘ**　まとひて―まよひて（内・支・聚・群）　**ト**　侍らす―み侍らす（書）　**チ**　海―川（支）　**リ**　さなくては―さならては（書・内・支・聚・群）　**ヌ**　おほえ―思（内・支・聚・群）　**ル**　侍らねは―侍らぬ（内・支・聚・群）　**ヲ**　やすき―さすか（内・支・群）、ナシ（聚）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新拾遺和歌集』秋歌上・三九六・「宝治元年十首歌合に、海辺月」・冷泉前太政大臣

おしてるや難波のうらの夕なぎに蘆の末葉を出づる月影

『題林愚抄』秋部三・海辺月・四一五六・「同〔新拾〕」・冷泉前太政大臣

おしてるやなにはの浦の夕なぎに蘆の末ばをいづる月影

【語釈】

①わたの原空もひとつに見わたせは―海と空とがひとつになって見える情景を指す。月がともに詠み込まれた例には、「わたのはらしほぢはそらとひとつにてくものなみよりいづる月かげ」（『頼輔集』三一・「おなじ家（右大臣家）の会、うみのよの月」）、「おほ空とひとつにすめる水うみの波路よりこそ月は出でけれ」（『三井寺新羅社歌合』湖上月・四五・信親）などがある。

②うつらぬ月（かへイ）―諸本「うつらぬ月」とあり、永青文庫本の異本注記に合致する本文はみられない。判詞後半部の「うつらぬ月」の部分には異同がみられないことからも、諸本に従うべきか。但し判詞でも指摘されるように、海面に映らない月に波がかかるという情景は想起しにくい。「うつらぬ」にはあるいは「移らぬ」の意味の層があ

り、静止した状態の月を詠んだとも考えられるが、判然としない。こうしたあいまいな表現が、判者為家の非難するところとなったか。

③難波の空―「空」は、諸本に従い「うら」とあるべきか。永青文庫本の親本までの段階で、仮名表記「そ」と「う」の字体類似による誤写が生じたと考えられる。

④うつらぬ月にかゝる波思よるへき事ともおほえ侍らす―一般的に、「あきの海にうつれる月を立ちかへり浪はあらへど色もかはらず」（『後撰和歌集』秋中・三二一・清原深養父）、「月に浪かかるをりまたありきやとふけゐの浦のあまにとはばや」（『増基法師集』六・「月の海のおもにやどれるを、浪のしきりあらふを見て」）などのように海面に映った月に波がかかるという情景を詠むことが多い点を為家は念頭においているか。

【通釈】

五十六番

左（歌）　　権大納言（源）定雅

大海原も空もひとつになった様子を見渡すと、うつらない月に波がかかっていることだ。

右（歌）勝　　（西園寺）公相

難波の浦が夕凪を迎えた今、蘆の葉の先あたりからのぼってくる月であることよ。

〔判詞〕左（歌の）下句は（私の）愚かな心が困惑して、歌意を理解できません。（月が）海面よりのぼって（それに波がかかり）波間に入る（ように見える）、宵の間や明け方などの情景を詠んだのでしょうか。そうでなくてはうつらない月に波がかかる情景は考えつくとは思われません。右（歌）は取り立てて欠点はございませんので、あっさりとしているという点により右（歌）を勝とします。

〈五十七番〉

五十七番

左　　権大イ―　公基ロ（公もと　古本）

秋の夜の月にそみかく玉くしけふたみのうらによする白波

右　勝ニ　　為教ホ（朝臣イ）

（続後撰⑤）ます鏡みぬめの浦は名のみしておなし影なる秋の夜の月

月にそみかく玉匣ふたみの浦、そのゆへ侍に、ますかゝみみぬめのうらは名のみしておなしかけなると思より侍は、いさゝかめつらしく侍にや、玉匣より見所侍る、ますかゝみに心うつり侍ぬる、ひかめにこそ侍らめ、

【校異】

イ　権大―権大納言（書・内・支・聚・群）　ロ　公もと　古本―ナシ（書・内・支）　ハ　の―は（書・内・支・聚・群）　ニ　勝

―ナシ（書）　**ホ**　為教朝臣イ―為教朝臣（書・内・支・聚・群）
ヘ　続後撰―ナシ（書・内・支・群）、続後撰、秋中（聚）　**ト**　は―の（内・支）　**チ**　名のみ―なこり（支）　**リ**　に―にや（聚）
ヌ　よりも―より（支）　**ル**　侍る―ナシ（内・支・聚・群）
ヲ　に心―心に（支）　**ワ**　侍ぬる―ぬる（内・支）、ぬるか（支）、侍るめる（聚）、ぬ（群）　**カ**　ひかめ―目（支）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三四九・「（十首歌合に、海辺月といへる心をよませ給うける）」・藤原為教朝臣

ますかがみみぬめのうらは名のみしておなじかげなる秋のよの月

『歌枕名寄』三犬女浦・四三五八・「続後六　月」・右兵衛督為教

ますかがみみぬめのうらは名のみしておなじかげなる秋のよの月

【語釈】

①月にそみかく―この詞つづきでの例は少なく、先行例としては「あきらけきみかげになるる池水を月にぞみがくよろづよの秋」（『建保六年八月中殿御会』二五・信実）がみえる。当該歌とほぼ同時代の例としては、「白妙になみのよせくる玉つ島月にぞみがくおきつ塩風」（『建長三年九月十三夜影供歌合』百二十五番左・名所月・二四九・雅言）、「くもりなくこほりてこゆる冬の夜の月にぞみがくいけのかがみは」（『実材母集』五九四）等があげられる。「みかく」と「玉」は縁語。

②玉くしけ―化粧道具を入れる櫛笥の美称。「恋ひつつも今日はあらめど玉くしげ明けなむ明日をいかに暮らさむ」（巻第十二・二八八四・（「正に心緒を述ぶる」））等、『万葉集』より用例がみえる。当該歌では、四句目の二見の浦にかかる枕詞として機能している。

③ふたみのうら―二見の浦。播磨国と伊勢国それぞれに該当する地があり、作例も両方確認される。櫛笥の縁語「蓋」の連想から二見浦と詠み込まれる例の早いものとして、「ゆふづくよおぼつかなきを玉匣ふたみの浦は曙てこそ見め」（『古今和歌集』羈旅歌・四一七・（詞書省略）・兼輔）がみえる。「玉匣ふたみのうらの秋の月あけまくつらきあたら夜の空」（『拾遺愚草』院五十首建仁元年・秋・一八〇一）、「秋の月ひかりぞまさる玉くしげふたみのうらの明方の空」（『正治後度百首』暁・六二・後鳥羽院）等は、兼輔詠の影響を受けた例。

④白波―白くたつ波の意。「あけてみるかひもあるかなたまくしげふたみのうらによするしらなみ」（『伊勢大輔集』一五六・「かたたがふ、とて人のもとにいきたりしに、いへあるじのちごに丁子をいれてとらせたりしかば、おやのおこせたりし」）、「月影のふたみのうらにかたぶけばかがみをあらふおきつ白浪」（『出観集』秋・四二六・「暁望浦月」）等の先行例がみえる。

⑤ます鏡―「まそかがみ」等とも。よく澄んではっきり映る鏡が原義。「見る」「影」などに掛かる枕詞としてよく用いられる。

⑥みぬめの浦―敏馬の浦。摂津国の歌枕。「ます鏡」は「みぬめ」の

枕詞として機能しており、先行例としては「まそ鏡敏馬の浦は百舟の過ぎて行くべき浜ならなくに」（『万葉集』巻第六・雑歌・一〇六六・「反歌二首」）等、早くから認められる。当該歌では「見ぬ」の意を掛けており、「わが恋は君をみぬめのうらによるなみのしたくさかわくまぞなき」（『林下集』二〇八・「（恋廿首よみしに）」）、「よそにだにみぬめの浦にすむあまは袖にたまらぬ玉やひろはん」（『壬二集』院百首・恋・八七二）、「わすれ貝それも思ひの種たえて人をみぬめの浦みてぞぬる」（『拾遺愚草』内大臣家百首・恋廿五首・一一七二）、「秋の鹿わが身こす浪ふく風につまをみぬめのうらみてぞ鳴く」（同・権大納言家三十首・二〇六八・「海辺鹿」）、「ますかがみぬめの浦の名もしらずたがおもかげにかけてこふらむ」（『光明峰寺摂政家歌合』廿番・寄衣恋・三九・親季）等、恋の情趣で詠み込まれる先行例が多く、為家判「いさゝかめつらしく侍にや」はその点を指摘したもの。月との取り合わせでは「ます鏡みぬめの浦は波のうへにかすめる月の名にこそ有りけれ」（『洞院摂政家百首』春・霞・四三・知家）が先行例として確認される。

⑦**思より**―思い寄る。思いつく意。後例だが、九条基家は、宗尊親王詠「雪はたがことのはなればふるままにたのめぬ人の猶またるらん」（『宗尊親王三百首』冬・一八九）を「此風情、凡夫不思寄歟」と評している。

【通釈】

五十七番

左（歌）　　権大納言（西園寺）公基

秋の夜の月にこそ（照らされて）まさに光り輝いている、二見浦に寄せる白波は…

右（歌）　勝　　（藤原）為教朝臣

敏馬の浦（「見ぬめの浦」）とは名ばかりで他と同じぐらい澄んで明るい光である秋の夜の月よ…

［判詞］「月にそみかく玉匣ふた見の浦」（という表現は）、その由緒がありますが、「ますかゝ見みぬめのうらは名のみしておなしかけなる」と（いう表現に）思いあたりますのは、やや珍しいでしょうか。玉匣（の歌）よりも見所がありまして、ますかゝみ（の歌）に心が移り（映り）ました。間違った見方でしょうか。

〈五十八番〉

五十八番

左　　イ中――　為経

ロおほかたにくもりなき夜の月なれはさそな明石の浦もさやけき①

右　勝ニ　　信実　朝臣

ホいさこよひなたの海士の子しるへせよしほちの月を漕出てみん②

左くもりなき夜の月、その心すてかたく侍に、③さきに

ト申侍りつる明石の浦、④チ此ほとリ繁昌し侍にや、右

いさこよひなたの海士の子なといひしりて、さる姿と
みえ侍れは、又勝侍へし、

【校異】

イ 中――　―中納言（書・内・支・聚・群）　ロ おほかたに―おほかた（内）　ハ さそな―さこそ（内・支・聚・群）　ニ 勝―ナシ（書）　ホ いさこよひ―いさよひの（支）　ヘ さきに―さき（内・聚）　ト 侍りつる―侍る（書・支）　チ 此ほと―ことに（内・支・聚・群）　リ 繁昌し―繁昌して（聚）　ヌ いさこよひ―いさよひ（支）　ル 又―ナシ（内・支・聚・群）　ヲ 侍―たる（聚）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『夫木和歌抄』秋部四・「宝治十首歌合、海辺月」・五六五六・信実朝臣

いざこよひなだのあまのこしるべせよ塩路の月をこぎ出でてみん

【語釈】

①くもりなき夜の月なれは―「いつよりもくもりなきよの月なればみる人さへにいりがたきかな」（『後拾遺和歌集』雑一・八四一・「永承四年内裏歌合に月をよめる」・江侍従）は二句が一致する先行例。「神もみよくもりなきよのかがみ山いのるかひある月ぞさやけき」（『続後撰和歌集』賀歌・一三六三・「九月十三夜十首歌合に、名所月」・成茂）、「よもの海風しづかなる浪のうへにくもりなきよの月を見るかな」（同・一三六一・「寄月祝」・良経）は「くもりなきよの（月）」又「くもりなきよの月」が一致する先例。「よ」には「夜」「世」「代」が掛けられていて、「くもりなき夜の月」に太平の御代の意が含意されている。

②なたの海士の子―下句の「しほちの月を漕出てみん」と同じく、先行例を見ない。

③さきに申侍りつる明石の浦―本歌合五十五番右歌「昔よりきくや明石の浦の名も空にしらるゝ秋のよの月」（実雄）について、為家は「右明石のうらの名、此程おほくめなれ侍をもちて、負侍へし」と評した。

④此ほと繁昌し侍にや―ここでの「繁昌し」は、「評判になっている」「ひっぱりだこになっている」の意。『摂政家月十首歌合』は建治元年（一二七五）に開催されたが、その二十三番右（勝）の歌は「くるるよはあさぢがにはの月ならでまたまつむしよたれたのむらん」（阿仏尼）で、これについて判者の真観（藤原光俊）は「右は人をぞたのむくるる夜ごとに、と申す歌近年繁昌したる本歌にて、これをへつらはれたるにやとぞみたまふれど、庭もたしかに侍れば、まさり侍るべくや」と評している。

⑤いひしりて―詠みかたを十分に心得ている、言語表現を知悉しているの意。俊成も「すがたもいひしりてきこゆれば」（『中宮亮重家朝臣家歌合』）などと評している。

【通釈】

五十八番　　中納言（藤原）為経

総じて曇りない夜の月なので、（その月の光のもと）さぞかし明石の浦もさやかなことであろうよ。

右（歌）勝　　（藤原）信実朝臣

さあ今夜、灘の海士の子（私を）案内してくれよ。塩路の月を（舟を）漕ぎ出して見よう。

〔判詞〕左（歌）の、「曇りなき夜の月」は、その趣が捨てがたうございますが、（一方）先に申しました（ように）「明石の浦」は（最近）殊にひっぱりだこ（の、新鮮味のない表現）ではないでしょうか。右（歌）は「いさこよひなたのあまの子」など（と言って）表現を十分に心得て、一つの（典型的な）姿と思われますので、勝ちが適当でございましょう。

〈五十九番〉

五十九番

左　勝イ　　ロ衛通成

①名にしほふなかゐの浦の秋のよにゆくともみえてすめる月哉②

右　　ハ衛雅光

見わたせは野嶋かさきの③波④まより山のはならて出る月影

野嶋かさき、ふたつなき物と思しをみなそこにと

いへる古今下句⑤ホたかふ所なく見え侍うへに、なかゐの

浦、夜雲収盡⑥ヘおもかけまておもひやらるゝかた侍れは、

以左為勝、ト

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　右衛―右衛門督（書・内・支・聚・群）

ハ　に―の（支）　ニ　右近―右近中将（書・内・聚・群）、右近衛中将（支）　ホ　古今下句―古今哥下句（書）、古今の哥下句（内・支・聚・群）　ヘ　夜雲収盡―夜雲盡（群）　ト　以左為勝―左為勝（支）

【他所書伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①名にしほふなかゐの浦―「長居の浦」は摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区辺りで、「住吉」とともに詠まれる例が多い。「すみよしとあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり」（『古今和歌集』雑上・九一七・「あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける」・忠岑）は、『新撰和歌』『古今和歌六帖』『歌枕名寄』（『新撰和歌』『古今和歌六帖』は第二句「あまはいふとも」）等に採られる有名な歌。

②すめる月哉―「澄む」と「住む」を掛ける。澄んだ月が長居の浦に長く留まる（＝「長居」「住む」）様子を詠む。類想歌に「秋の夜はながゐのうらにとまりしてのどかにてらすありあけの月」（『永縁奈良房歌合』七番左・四一・上総君）がある。

③野嶋かさき―淡路国の歌枕。「月」を詠んだ先行例には「ことはむ野島がさきのあま衣浪と月とにいかがしをるる」（『新古今和歌集』秋歌上・四〇二・「題しらず」・七条院大納言）等がある。

④波まより山のはならて出る月影―「波間」から「月」が「出る」様子を詠んだ先行例に「しがのうらやとほざかり行く浪間よりこほりて出づるあり明の月」（『新古今和歌集』冬歌・六三九・「摂政太政大臣家歌合に、湖上冬月」・家隆）等がある。

⑤古今下句たかふ所なく―「ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月かげ」（『古今和歌集』雑上・八八一・「池に月の見えけるをよめる」・貫之）の下句と一致することをいう。

⑥夜雲収盡おもかけまておもひやらるゝかた侍れは―為家は左歌について、『和漢朗詠集』「秋水漲来船去速　夜雲収尽月行遅」（秋・月・二五三・野展郢　※正しくは「郢展」）の「月行遅」をふまえて解釈する。

【通釈】

五十九番

左（歌）　勝　　右衛門（督源）通成

有名な長居の浦の秋の夜に、西に行くとも見えないで（ずっと空に）住んでいる、澄んだ月であるよ

右（歌）　　右近（衛中将源）雅光

見渡してみれば、山の端ではなく、野嶋崎の波間から出る月の光であるよ。

〔判詞〕「野嶋かさき」（の歌は）、「ふたつなき物と思しをみなそこに」といいました『古今和歌集』歌の下句と違う所がなく見えます上に、「なかゐの浦」（の歌は）、「夜雲収盡」の情趣までも想像される所がありますので、左をもって勝とする。

〈六十番〉

六十番

左　　兵部イ―有教

①わたの原八重の塩路に雲消ロて②月すみのほる③すまのうら風

右　　弁内侍

④もしほくむ⑤夜はのさ衣あはれにそあまのしわさは⑥月やとしける

左、けしき（ニ⑦ハイ）思やられて、みたる心ちし侍（ホ）へし、右、⑧さきにありかたくみえ侍（ヘ）りつるあまのしわさ、⑨おなしこと（ト）はに優（チ）してこれまてかたひき侍ぬる、偏頗にや侍らん、

【校異】

イ 兵部—有教—兵部卿有教（書・内・支・聚・群） ロ 消て—さえて（支） ハ 右—右 勝（内・支・聚・群） ニ けしき—景気（書・内・支・聚・群） ホ し—ナシ（内・支・聚・群）

ヘ 侍りつる—侍へる（書） ト ことはに—ことみに（支）、こと（群） チ 優して—優にして（内・支・聚）、優美にして（群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①わたの原八重の塩路に—「わたの原」は、大海原、広々とした海、の意。「八重の塩路」も、遠く隔たった海路を意味する。「わたのはらやへの塩路をみわたせば浮きたる雲につづくしら波」（『宝治百首』雑・「海眺望」・三八八五・公相）。

②月すみのぼる—月が冴え冴えと空にのぼる、の意。「嵐吹く有明の空に雲きえて月すみのぼるたかまどのやま」（『長明集』三三・「月」）。

③すまのうら風—須磨の浦は、摂津国の歌枕。浦を吹く風が雲を吹き消す。「秋の月浪ぢもとほくかげさえて心さへにもすまのうらかぜ」（『後鳥羽院御集』浦月・一四八九）。

④もしほくむ—海水を汲む、の意。「もしほくむ袖の月かげおのづからよそにあかさぬすまのうら人」（『新古今和歌集』雑下・一五五七・「（和歌所歌合に、海辺月といふ事を）」・定家）。

⑤夜はのさ衣—ここでは、海人が潮を汲んで潮に濡れた衣、の意。「すまのうらしほくむあまの衣手にぬれてぞやどる在明の月」（『建保名所百首』須磨浦・三八八・家衡）。

⑥あまのしわさ—海人の行い。海人の仕事。「よさの海のあまのしわざとみしものをさもわがやくとたるるしほかな」（『和泉式部集』五六三）。

⑦けしき思やられて、みたる心ちし侍へし—「けしき」については、五十四番判詞参照。「みたる心ちす」は、眼前で見るかのような趣がある、の意。

⑧さきにありかたくみえ侍りつるあまのしわさ—「あまのしわざ」は、本歌合・五十三番左・女房（後嵯峨院）歌に詠み込まれ、為家は、判詞で「めつらしくありかたきあまのしわさと見たまへ侍れ」と評している。

⑨おなしことはに優してこれまてかたひき侍ぬる—後嵯峨院の歌と同じ詞を用いていることで優遇して、この歌までも依怙贔屓してしまいます、の意。「優す」は、相応に待遇する、の意。「亡き跡にも、さしも道に心ざし深かりし者なればとて、優して十八首を入れられたりければ」（『無名抄』「道因歌に志深事」岩波大系本）。

【通釈】

六十番

左（歌） 勝 （源）有教

広々とした海の、遠く海路の向こうに雲が消え、月が冴え冴えとのぼる須磨の浦には風が吹き渡る。

右（歌）　　弁内侍

海水を汲む海人の、夜の衣は（いかにも）気の毒に見えるが、あわれにも、海人の行いは、その衣に、月を宿したのだ。

〔判詞〕左（の歌）は、その情景が思いやられて、眼前で見ているかのような心持ちがするようです。右（の歌）は、前の番いで、素晴らしく思われた「あまのしわざ」と、同じ詞であることで優遇してしまい、この歌まで依怙贔屓してしまいましたのは、不公平でしょうか。

〈六十一番〉

六十一番

左　持イ　　師継ロ

漕出しまつらの海ハをなかめつゝ月になれぬる秋①のさよひめ②

右　　雅忠朝臣

白妙の袖③しの浦による波の数④さへ見えて月そさやけきホ

秋のさよひめはへめつらしく、数さへ見えてはへめなれて

侍れと、左はちからをいれ、右はやすくいトひくたして、

やうかはりたる持チと見え侍にや、

【校異】

イ　持―ナシ（書）　ロ　師継―右近中将師継（書・内・聚・群）、右近衛中将師継（支）　ハ　漕出し―すきいてし（支）　ニ　海―浦（内・聚）、海（群）　ホ　月そ―月に（内・支）、月そ（聚）　ヘ　さよひめは―さよひめ（内・支・聚・群）　ト　いひくたして―いひ出して（内・支・聚）、いひなして（群）　チ　やう―ナシ（内・聚）　リ　かはりたる持と―かはりたる躰侍と（支）、かはりたる躰、持と（群）

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』雑部五・海・一〇三五五・「（まつらのうみ、筑前）建長元年歌合」・花山院内大臣

漕出でて松浦の海をながめつつ月になれぬる秋のさ夜姫

〈右歌〉

『源承和歌口伝』一一一・雅忠卿

白妙の袖しのうらによる浪の数さへみえて月ぞさやけき

【語釈】

①まつらの海―肥前国の歌枕。任那へ行く大伴佐提比古の船を高山から領巾を振って見送った松浦佐用姫の伝説がある（『万葉集』巻第五、『肥前国風土記』）。

②秋のさよひめ―判詞で「秋のさよひめはめつらしく」と指摘されるように、「さよ姫のひれふる袖もややすずし秋をまつらの山の下風」

（『建保名所百首』夏十首・松浦山 筑前国・三五二・家衡）など夏の歌として詠まれる例が多い。

③袖しの浦―出雲国の歌枕（『八雲御抄』巻五）。駿河国・伊勢国とする説もある。「からころもそでしのうらのうつせがひむなしきこひにとしのへぬらん」（『後拾遺和歌集』恋一・六六〇・藤原国房）、「から衣袖しのうらの月影はむかしかけける玉にやあるらん」（『清輔集』一四一・「（月三十五首のなかに）」）、「浪かくる袖しのうらの秋の月やどかるままにまづやしぼらん」（『拾遺愚草』下・二三六一・「（仁和寺宮より忍びてめされし秋題十首、承久二年八月）秋旅」）などの例がある。

④数さへ見えて―「白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへ見ゆる秋のよの月」（『古今和歌集』秋歌上・一九一・読人不知）に拠る表現。

【通釈】

六十一番

左（歌）　持　（藤原）師継

（佐提比古が舟を）漕ぎ出した松浦の海をながめつつ、月にも馴れ親しんだ様子の秋の佐用姫であることよ。

右（歌）　（源）雅忠朝臣

袖師の浦に寄せる波の数までが見えるほど、月がさやかであるよ。

〔判詞〕（左歌の）「秋の佐用姫」は珍しい表現であり、（右歌の）「数さへ見えて」はありふれた表現でございますけれど、左（歌）は力が入った様子で詠まれており、（また）右（歌）はあっさりと言い下していて、それぞれ様子が変わった持とみえますことでしょうか。

〈六十二番〉

六十二番

左　勝イ　沙弥蓮性

①うな原やなこの②塩干の③真砂ちにきよき月夜のさもそロさやけき

右　下野

ふけハゆけは浦④こく舟の音までもさもすみまさるニ夜はの月哉ホ

漕船のをとまてすみハまさる心、きゝなれて侍にや、なこの塩干のまさこち、まことにきよけトに侍チれは、

以リ左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ（書）　**ロ** そ―や（群）　**ハ** ふけ―ふかく（内）、深（支）　**ニ** まさる―わたる（支・聚・群）　**ホ** 哉―かな（款イ）（群）　**ヘ** すみまさる―まさる（内）、すみわたる（聚）　**ト** きよけ―よけ（内・支）　**チ** 侍れは―みえ侍れは（書・内・支・聚・群）　**リ** 以左―左（支）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①うな原や―海の広々とした様への感嘆を表す。「うなばらやおきつしらなみたちくらしやそしまめぐりやすからふね」（『千穎集』九〇・「心細十首」）等が早い例。なお、「うな原や」を初句に置く例は、勅撰集では「うなばらやたゆたふ浪のはてもなしいづくなるらんくものをちかた」（『続古今和歌集』雑歌下・一七二六・「宝治二年百首歌たてまつりけるに、海眺望を」・実氏）までみえない。

②なこの塩干―「なこ」は、奈呉（名児）の海。「奈呉の海人の釣する舟は今こそば舟棚打ちてあへて漕ぎ出め」（巻第十七・三九五六・「大目秦忌寸八千島の館に宴する歌一首」）、「奈呉の海の沖つ白波しくしくに思ほえむかも立ち別れなば」（巻第十七・三九八九・「大目秦忌寸八千島の館にして守大伴宿祢家持に餞する宴の歌二首」）、「東の風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ」（巻第十七・四〇一七・家持）等は、越中の歌枕。一方『万葉集』には、「住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず」（巻第七・雑歌・一一五三）ともみえ、摂津の国にも同名の海辺があったことが伺える。塩干は、引き潮の意で、「奈呉の海に潮のはや干ばあさりしに出でむと鶴は今そ鳴くなる」（『万葉集』巻第十八・四〇三四・（詞書省略））、「うなばらやなごのしほひのはま千鳥なくねもさえてうら風ぞ吹く」（『新和歌集』冬歌・三三一・「（海辺千鳥）」・忠茂）、「なごの海しほひ塩見つ磯の石となれるが君が見えかくれする」（『頼政集』四三五・「時時見恋」）、「ひとりぬるなごのしほひのいそまくら浪たかくみゆたごのうらふぢ」（『出観集』一二九・「旅宿藤花」）等、用例が散見する。

③真砂ちに―引き潮であらわれた真砂に月光が照り映える趣向。後例だが、「霰ちるなごのはまべのまさごぢにいづれをもとの玉とひろはん」（『建長八年百首歌合』五百八十二番右・一一六四・源具氏）とみえる。

④浦こく舟の音までもさもすみまさる夜はの月―月の輝きと静寂の中での物音という視覚と聴覚との取り合わせ。「月影にふえのねいたくすみぬなりまだねぬ秋のよやふけぬらむ」（『恵慶法師集』二四・「月夜に、ふえふきて、をとこゆく」）、「あき風のふけひのうらに空はれて波のおとまですめる月かな」（『隆信集』二〇一・「海辺秋月」）、「てる月の光と共にながれ来ておとさへすめる山川の水」（『慈鎮和尚自歌合』大比叡十五番・七番左・一三）等は同様の趣向。類似歌として「難波がた蘆間を分けて漕ぐ舟の音さへすめる秋の夜の月」（『治承三十六人歌合』海上月・九七・寂念、『玄玉和歌集』天地歌下・二〇七）があげられる。

【通釈】

六十二番

左（歌）　勝　　沙弥蓮性

広々とした海よ、奈呉の（海辺の）引き潮にあらわれた真砂を敷いた路に清らかな月夜が本当にあざやかである。

右（歌）　　下野

（夜が）更けていくと浦を漕ぎゆく舟の音までもいやまさに一層澄む夜半の月であるなあ…

〔判詞〕漕ぐ舟の音まで澄み勝る（という一首の）心は、聞き慣れていますでしょうか。なこの塩干の真砂路（という表現）は、本当に美しいですので、左歌を勝とする。

〈六十三番〉

六十三番

左　　為氏　朝臣

長しとも月にイおほえぬ秋のよのロをイなとかふけゐ①の浦といふらん

右　勝ハ　　少将内侍

秋をへてよわたる海②士のすて衣塩なれにけるニ袖の月哉ホ

左、なとかヘふけゐのといへるトほとチ、思ふリ所ありけに

みえ侍を、月におほえぬといへるヌるや、③たゝことはヲに

侍らん、右ワ、夜カわたる海士のすて衣しほヨなれにける

袖の月は見所侍へきにや、右勝タかイ侍へし、

【校異】

イ　月に―月は（内・支）　ロ　よの―よを（書・内・支・聚・群）　ハ　勝―ナシ（書）　ニ　ける―けり（支）　ホ　月哉―月かけ（内・支・聚・群）　ヘ　なとか―なと（内）　ト　と―なと（書・内・支・聚・群）　チ　ほと―程と（支）　リ　思ふ―ナシ（支）　ヌ　と―なと（内・支・聚・群）　ル　いへるや―いへるにや（支）　ヲ　たゝことは―たゝ哥言葉（内）　ワ　右―ナシ（書・内・支・聚・群）　カ　夜―世を（支・群）　ヨ　しほ―ナシ（内・支・聚・群）　タ　侍へし―侍へし（書・内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①ふけゐの浦―和泉国の歌枕。「時つ風吹飯の浜に出で居つつ贖ふ命は妹がためこそ」（『万葉集』巻第十二・悲別歌・三二〇一）、「あまつ風ふけひの浦にゐるたづのなどか雲井にかへらざるべき」（『新古今和歌集』雑歌下・一七二三・「殿上はなれ侍りて、よみ侍りける」・清正）などの例がみえる。「夜が更ける」との掛詞の例としては、「しかのねをあはれときくにあきの夜のふけひのうらにちどりさへなく」（『国基集』一〇〇・「いづみのくにふけひのうらといふところに、まかりとどまりたりしに、よふけてやまのかたにはしかのこゑきこえ、なぎさにはちどりなきしかば」）、「まちかねてさよもふけひのうらかぜにたのめぬ浪のおとのみぞする」（『千載和歌集』恋歌四・八七九・「寄浦恋といへるこころをよめる」・二条院内侍参河）などがある。

②海士のすて衣塩なれにける―「すずか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん」（『後撰和歌集』恋三・七一八・「女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて」・伊尹）と類似した発想。

③たゝことは―歌語としてふさわしくない、俗な表現。「月があまりに美しいので、月に向かっていると時間が経つのを意識しない」という意を「月におぼえぬ」と縮約した点を指すか。これに類似した表現は「くもれかしながむるからにかなしきは月におぼゆる人の面影」（『新古今和歌集』恋歌四・一二七〇・「（題しらず）」・八条院高倉）、「草まくら都の秋をさそひきて月におぼゆるふるさとの空」（『後鳥羽院御集』建仁元年三月内宮御百首・雑二十首・二八三）などにみられる。

【通釈】

六十三番

左（歌）　（藤原）為氏朝臣

（月が美しいので）長いとも月に向かっていると意識しない秋の夜なのに、どうして吹飯（夜が更ける）の浦というのだろうか。

右（歌）　勝　少将内侍

幾秋を経て、暮らしを立てている海人の脱ぎ捨てた衣の、潮でぐっしょりと濡れている袖に映った月（の美しさ）よ。

〔判詞〕左（歌の）、「などかふけゐの」というあたりの表現は、思うところがあるように見えましたが、「月におぼえぬ」という表現は、（歌語ではなく俗な）ただの言葉のようでございます。右（歌）の、「よわたる海士のすて衣塩なれにける袖の月」という表現は見所がございますでしょうか。右が勝でございます。

〈六十四番〉

六十四番

左　勝イ　経朝朝臣

和哥のうらや①昔②にかへる波の上に光③あまねき秋のよの月

右　沙弥禅信

里の海士のし④ほたれ衣ほしやらてさ⑤なからやとす秋の夜の月

右、上下かなひてよろしく侍に、左、わかの浦、昔にかへるとをきてニ、光あまねき秋の夜の月といへる、尤宜ホ、賞翫可為勝ヘ、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）、持（内・支・聚）　**ロ**　和哥のうらや―わか（続拾遺・賀）の浦や（聚）　**ハ**　かへる―ナシ（支）　**ニ**　をきて―をき（内・支・聚・群）　**ホ**　尤宜―尤是（書・内・支・聚・群）　**ヘ**　勝―持（内・支・聚）

【他書所伝】

〈左歌〉

『雲葉和歌集』秋歌中・五六四・「仙洞にて十首歌合侍りしに、浦月」・藤原経朝朝臣

和歌のうらやむかしにかへるなみのうへにひかりあまねき秋の夜の月

『続拾遺和歌集』賀歌・七四一・「宝治元年十首歌合に、海辺月」・正三位経朝

わかの浦やむかしにかへる浪の上にひかりあまねき秋の夜の月

『歌枕名寄』玉津島篇・八三三七・「続拾十」・正三位経朝

わかのうらやむかしにかへる波のうへにひかりあまねき秋のよの月

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三五〇・「(十首歌合に、海辺月といへる心をよませ給うける)」・源俊平

すまのあまのしほたれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

『歌枕名寄』摂磨・四二五一・「続後六」・源俊平

須まのあまの塩たれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

【語釈】

①和哥のうら—紀伊国の歌枕。同地にある玉津島神社は、和歌の神として衣通姫を祀る。ここでは、和歌の道をも意味する。「ふくかぜものどけききみのよよのあとむかしにかへるわかのうらなみ」(『新古今竟宴和歌』一七・具親)。

②昔にかへる—古の聖代に立ち返る、の意。「よものうみむかしにかへるなみのうへにはまびといまやみかりまつらん」(『続古今和歌集』雑中・一六七四・「(建保四年人人に百首歌めしける次によませ給ひける)」・道家)。

③光あまねき—光が遍く照らす。治世を言祝ぐ意を込める。「世をてらすあまねき空の光にも月をぞ千世のかげに頼まん」(『紫禁和歌集』一〇〇五・「同八月十五日夜今夜庚申於殿上人人詠歌出て、当座」・順徳院)。

④しほたれ衣—海人が潮を汲んで潮に濡れた衣。「須磨の海士の塩たれごろも打ちはへてきてはなどみぬなみの月影」(『最勝四天王院和歌』諏磨浦摂津・一四一・後鳥羽院)。

⑤さながら—そのまま。「夏の夜は山のはいづる月影のさながらのこる在明のそら」(『宝治百首』夏月・一〇四九・公相)。

【通釈】

六十四番

左(歌)　勝　(藤原)経朝朝臣

和歌の浦の、古の聖代に立ち返る波の上で、秋の夜の月が普く照らすことだ。

右(歌)　沙弥禅信

里の海人の潮垂れ衣をすっかり乾かしてしまうことができなくて、(美しい)秋の夜の月をそのまま宿していることだ。

〔判詞〕右(の歌)は、上句と下句がぴったりと合っていて悪くはありませんが、左(の歌)は、「和歌の浦」「昔に返る」と置いて、「光

あまねき秋の夜の月」というのは、いかにも良い表現で、賞賛して勝とすべきでしょう。

〈六十五番〉

六十五番

左　勝イ　越前

明石かた塩やく海士の煙たに①雲こそなけれ月のすむ夜は

右　前権大二―為家

秋の夜の②名たかのうらの塩風に影さしのほる月のさやけさ

左月のすむ夜はといへる程、こひねかふへきすかた

にあらす侍を、③右おなし文字あまりにおほく侍

にや、歌合にはとかめたる事も侍れは、尤負侍へし、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）　ロ　雲―くま（書）、今（内・支・聚・群）　ハ　夜は―よ（支・聚・群）　ニ　前権大――権大納言（書・内・支・聚・群）　ホ　すかたに―すかたには（内・支・聚・群）　ヘ　あまり―あやまり（内）　ト　事も―言葉に（内・聚）、事に（支・群）　チ　尤―右（内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①雲こそなけれ―永青文庫本の「雲こそ」は孤例であって、書陵部本は「くまこそ」、その他の諸本は「今こそ」となっている。一首の意味から判断して「くま」が適当と思われるので、ここでは「くまこそ」を採用して通釈する。

②名たかのうら―紀伊国の歌枕。『五代集歌枕』『八雲御抄』は遠江とする。高名な、評判の、の意を掛けて用いられることが多い。「紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを」（『万葉集』巻第十一・二七八〇）はその一例。

③右おなし文字あまりにおほく侍にや、歌合にはとかめたる事も侍れは―『袋草紙』下巻に賀陽院七番歌合（寛治八年八月十九日　判者経信卿）二番の筑前（左）と大江匡房（右）の番の、匡房歌（「しら雲とみゆるにしるしみよし野のよしのの山の花ざかりかも」について、筑前の陳状に「輔親が母に申しし事を幼少にて承りしかば、「同字三はいかがせむ。四以上あらん歌をば、公けの歌にはとり出さじ」と申ししに、右歌「し」の字四候ふに、持と定められたるが、口をしきなり」と云々」とある。文中の母は輔親の子伊勢大輔。この後に顕昭が匡房の歌を「シの字五、ノの字五なり」と訂正したことなどが記され、清輔は、同字が多くてもすぐれた歌は勝っているとして、具体例を列挙している。当該為家歌は「の」の字六。但し自作を負けとするための理由付けと考えればよかろう（『袋草紙』の引用

は新日本古典文学大系本によった)。

【通釈】

六十五番

左（歌）　勝　　越前

（ここ）明石潟では、藻塩を焼く海士の煙さえも（光に照らされない）隈がないことだ、（こんなにも）月が澄む夜には。

右（歌）　　（藤原）為家

秋の夜の（風趣で名高い）名高の浦の塩風（の中）に、光が（高く）さしのぼってゆく、月のさやけさといったら。

〔判詞〕左（歌）の「月のすむよは」といったところなどは、こいねがうべき姿ではございませんものの、右（歌）は、同じ文字が余りに多うございますのが、歌合に（出す歌として）は、咎められていることもございますので、どういっても負けでございましょう。

〔付記〕

本稿は、平成十九年度文部科学省科学研究費補助金、若手研究（B）研究課題「和歌作品の調査、収集を通した鎌倉時代西園寺家像の再構築」（代表者　藤川功和）による研究成果の一部である。